

東 壙 子

番 外 書 冊

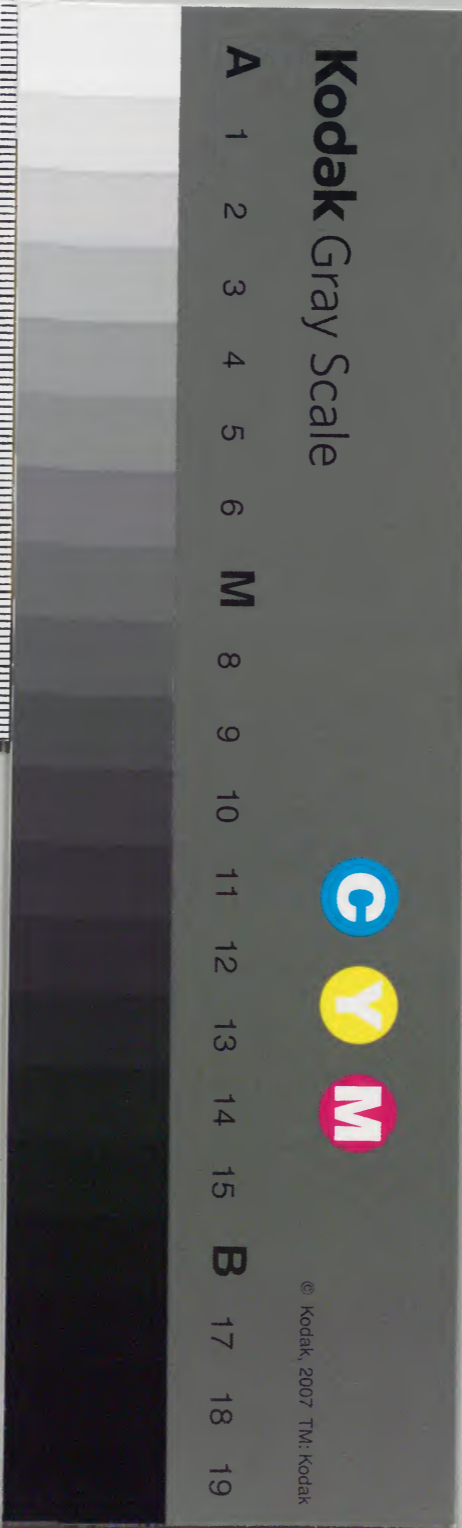
和 書 門			
一	九	〇	二
一	七	八	四
九	冊	架	函 號 類

漫 筆 雜 考

內 閣 文 庫			
二	一	九	〇
三	五	二	四
函	冊	架	號 類

內 閣 文 庫			
番 號	和	19024	
冊 數	5	(2)	
函 號	213	40	

〇〇〇〇〇



神教者と云ふはかり智と神教とは徳を得るをさし

○淋瀝の覆ふと云は徒歳且歳暮のちと披露せん標覆ふ
西節吟或は塗る吟かごとく吟を著する意は存例也樂府

明辨之吟嗟慨歎愁憂也仲舒曰吟又屈氏漢文の詩
又澤畔吟とわきで歳首はをさすべし例あり

○亭主と東と云え持人と半東と云茶道の具社の東の

こけり出しを梅とる小左傳ふ晋秦鄭と周鄭はいと秦
蓋舎鄭以東道と云ふ夫鄭は秦の東から是より

主人と東と称とるは

○茶室の潜はとにむり工と云貴姓長幼の分なくけ

より出入を全元居の制より也はぐとの在大侍も或は自ら

炊獨矣と云は冥く燈膳よ小室を補理古墨古筆を

収む宛を中と寂を甘し和して柳火爐と設定と云ふは

は刻物を不差来と云をさすは清なる飯後酒の食の太やと忘

るは皆神代元居の遺風と云はんを全好古のれ茶小錢を

修素小儀と云はつちがうと寂美と解味と云は不可不也

道はと云く著る惜むと利人の豊はつちや大は後有安

○幾内の儀氏婦と云はて銜妻と云はなり或は左傳昭の

二十二年小有仍氏の女は美色といふ小玄妻と云は

玄妻の字にて左傳より出たりといふは例の玄妻は

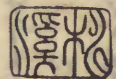
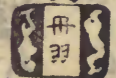
新と刻ふ牛の刀と用ふるはりしをり按るに字書に鉉の賣
 也とありしは此れ婦とて賣婦とにけり之をいふと
 法妻の術妻ありて東都を傾城守るの所莫と内者を安
 とも街と傳ふるはり

○世に存星の盆と云ふ古き有ては存とこれと目利とて
 存星の盆出来成り後出来たりと鑑定に存星と器物の作
 道の名と定ふるはなり依り宋の張成之盆の地而小早流
 それを存星と稱し張成古今の細人なりとて南都土門
 氏所傳之物と内存星の盆あり是れ東に殿法在傳之盆
 一を傳來に之物と稱す徐熙の路松屋肩傳存星の盆と

依り張成よりて下画とる麟之圖と許由瓢と鄭るを
 土門氏の筆記の寫を友人南都の安埋和の元よりて是の
 ○法興寺寶城の碑は中古に土中に埋きて年久し
 く知れざりしに法興の吉村の巨匠に巨萬の材を費し
 文城郡臥里に方と地下五尺に掘せらばして後に掘り
 出せり一處に法興寺今文城郡市川村に有る碑文
 暨石の形と云ふと諸書に出たてを以て贅せんとす
 秦漢の昔ありて中朝の末に移るの矣漢より成漢より
 漢守府に有る碑とて一は法興守府の膳所郡なり堀出せ
 一は文城郡に在る碑とて一は再興のより碑文に



丹枕渡寫



しりや清く人死して食らばしとを太く怒りしと

○宇地打の史書の戯れ清家筆記の和海信は周陳し書
 けりあわり今も浪花をい解きしと起しん宇地打を
 せり京師の小史柳の枝とん造りる宇地の栴とんく
 の栴とん強くと弱とんを制栴の交り麻皮とあし栴とん
 せり形よ菱形よ皮を剥身の交りふ皮とひれて白
 本とせり平初れ頂とんらんぐれ栴とんせよ已端平ホ
 へは栴物とせりよ兼大打とん大退物と戯擬せりしと
 ○うふまの字の懸字とぶらび○禁裏は何の様の字を
 だうく此と除いりり方の史書とんてぶら

○柳とみどりくふり初いしと對とん燒の福曲と出あ
 け一らの結結の体わあろの終章なりしと云はるなりしと
 たまゆりしと和海信小西の法師のいしと武士の道我
 かりて武士より和の道我をきて和弁ふかり方の道
 我ふれ方に有をうら孫とん道の連とんは云だうびたを
 初い柳とみどりりりり白のまけけりやし有しとん
 とん燒の福曲と柳とみどりしとる身二義ぶら
 ○柳の精秀をばらものと英と云歎の群し特かりしものと雄と
 云故よくの文武英異をばらものと名づきて英雄と孫聰明秀出
 と英と云膽力人よとてつを雄と云こし楊慎が丹沼録と

浮舟の景物などて櫻敷城と稱しては付くも能ひるなり
南極舟の下にそしん事かかるとは神杖二つありて
かといふは浮舟出づる人急ぎ流の幸にすまはれ古風い甚だ
真の藝漬の幸にすまはれとて漬漬の身身に塩のさたか
くはうとねものなり

○網代の遺諸遺匠は後にも後にもは度唯古きと
えらに網代舟網代舟と稱て丸のふら

とて網代といふる竹島の遺具かといふはそれ網代は網
とつる場あり今後九州といふは洋の内小湊瀬の場とに

て海程を納て江系が網代波が網代といつて自かしく法お
の網代を換わりて後月く傍舟を打これ網代舟の昔
と申矣使とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
橋の場へ人といふは夜かあびて換へんとて換へん舟網代舟と
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
江備物何かとの編曲のさといふなり

○曾我足牙の足と十師依成と云ふとみ師は政といふ
これ長知師と夫といふはなるなるなるなるなるなるなるなる
しつと舟のみ師は小條は政の烏帽子足とては師義
舟の舟は維といふ師は宗と稱号は実と云ふ東氏の表曲とい

よして工後一膳の英雄と号し曾我足牙のよと備前
 工後と号す是に田患常が御若寺河洲に於て右大臣殿の云
 法除くはるみか曾我は家と同日の淡りて中東氏の毒
 計と出るものなりしは政長幼の布を失せしに此と
 母は此頃心毒の嫡子とち神と称妻腹の嫡子と小を神
 と称小次郎小を神と称とらぶとてお嫡庶の別を野史
 小説といふと書と淡と淡く見らるべしと云はなり
 ○初百合と称するもの草藕なりしは和州遊歴の折に
 旧郡一宮院定濟元の侍流を預り安田宗頼の妹を以て
 一は是侍の由来由と尋ねるに是利定慶法親と御

入室の頂室所殿より附らしては御家人流より挿花流跡
 といは草藕と初百合と称する一は一はこは梅系
 草藕は和名かこゆアと云ユの及一はと云るは俗力タラ
 リといふと眞ね小多く和州河洲に於ては法法はふもわりとを
 播州神出山を満山とてこは神出といへるは有馬より
 見ゆり有馬家とて云ふなり初百合の花を淡紅紫色とて
 むやしつべとたかり室に先年行末とていへるは有馬の
 花と我家より初初百合と称せんは柳物とて被家せし
 ころやそれ貝母と母子百合と云ふものこそと云ふなりと
 和名といひゆこの程頃かぐ草藕はは花とおと云



周仙寫



と拙紅李白のいろなく疎不棄た者流うらく初夏を去
 云々の有るのと備此かこいゆりと萬葉及新撰の帖あり
 詠と西の堅香子の花ありと云渡りもと寺舟のう乃
 かとうのふふといふ休閑寺舟のうふ合せりてかこことば
 何物かたてかこことば心のものもて家法をくく山棲て
 生育志強と物なれどこいけりて一者うとゆり又文章
 ゆりまうと初ゆりて云日先かそとごんたいろとてしぞ
 ○人相者流人と相て為今あふあしていふ不法徳と徳
 して幸福を祈りて一殺生に法徳の至とる也とせける
 奥をそとふていひて佛種子の蓮尾に附りたるふじ

むけりを殺とと君子れ思ひをなるといふ孟子曰君子
 子之於物也愛之而弗仁於民也仁而弗親と仁宜か奥へ人
 食らふり耕作場養の助たりんね天是まよを授るふ一尾よ
 万とみと足遠比の自然なり何んぞこれを存らて法徳が
 といふ鳴りゆいんや奥の捕りたるを法徳に
 法徳が復復者があるふ殺生とせんを却ら奥を捕り
 者があふるといふ例は激し流る俗語不奥を捕るを
 六年止とて人の食盡るふとていふも授者たる法徳に
 施半籠りて法徳のゆがふゆくふ人の
 ○先天の黒底とて後天の文欽を生ト眉乞と作

額と後て遊治妖奸の姿しふさるり道徳仁義の教を
 諭して麗容は體の姿もたんとを教を以て風鑑
 者流の道するべし諸凡鑒家はなほと亦不親相ありし
 と者人相さるる書しと不親の字を清小相在爾室尚
 不愧屋漏しと相あると相人ともく云ふる小親
 者の字へ不尚を御那代醉十五云一士子赴省誠甚愜意
 待榜周遊僧寺廊廡有鬻相者遂扣之鬻相の字は
 ちりし橋頭賣卜寺院鬻相和漢域と角どるべしにりし
 ○家相大に流行し都鄙賢愚こし者と亦人多く接ふ
 劉済が釋名に宅托也人之併處也として必是人の人物或は相

かどゆかどく又刀刃の鞘柄はしり竹皮を縫見串に金
 銀と縷たりし身純刀かど竹の用を立るや白鞘切柄
 して名刃と号し家相さるる四神相の比の家
 宅十有具其一金城湯池の固ありしと信愚なりか
 竹が長きか人秦の始皇竹房と造て二世竹房と斃と全
 家相小真履下りしと下りし定に予解歴中にたりしは活有
 和州新田なる高賈家相と改人と然る良花より家相者を
 括りて名と号し宅と造て十分は右相とて西之年
 の不福今や来らんと侍らふ身と不あさあり新通野
 家断絶し及びねえりが寓せし漢村同く家相者不指也と

又その門を建たせ荒と挽きて相者の意は任出右相満て
と收びに翌年の春金氣温疫と病を至上相續とて
盛仁の嫡子を失ひ普治を散財し之祖傳来の任所とて
了そ大不幸行ふよりて避るゝとかれや此を感いよく解
じき家相と密にふし物しと男へあが知とる百姓とて
村長と勅免伶例ありりり心憂哀云の所と着て九府録
とてしし徒金

○本曾街道は此古き今のどく人馬此れ兼交してさうし
えより流曲のと焼れ發湯より若光ぞや孰たのむと改定を依
とりて此の詔意之都の舞女佐州若光寺清を志し此路

へしひ城後わげ海のこつとと挽と違へ有からし海は昔と
今の葛橋番の版一かどと棧の中にはむらと中けた中と
地外のものへ渡りぬぎ路程あり彼宮ふ合をほふらと云
しどく推美しゆかまこしを系初より百軍よりさうの佐州
若光寺へ武百より有城後出るととををんて一平家既
園楽向ふより山後道へ出より本曾屋をぬ向りては一
本曾屋自中からたて居居と經くとからち家計糧道と
断々ごと俱利迦屋に向りて本曾の坂海自中から改と思
りるが能成と成く佐州より順路順りて志りて思平
武百年より本莫大の人とせん断岸級壁を筑りて改舎と定

延いて本方所の河程川の邊に於ては延水の士民も自以て
 崇むるに実道廣く所けしはは方なり
 ○坊南今其村に往古に御厨子所日く依御の料れ奥
 洞進の処より由緒有るところを現立し諸役御免あり
 御の例よりして今も不絶に月十二日ハ上御所院御所
 執極家大朝を献じ村長若原西人丈致と着し是に
 半解て京水尹西津奉以所所れをそと席村にけし件
 古式有しりやむ祇園大宮に神輿と祇園今の貴倉村
 より加興丁と初まこれ借所洞進の順承に承けく康
 今其村の役所を構有替ふ比下人交代して洞進の役と

初は後冷泉院の御所祇園今初はは東けく店、
 西ハ祇園大宮に轉を定むるより今其村に神人
 所也 祇園大宮に轉を定むるより今其村に神人
 けく店より神輿と早さば例よりして今其村に加興
 丁と初むむ故に今其村に店より比の口を今其村に加興
 比の口より課役の所及渡所は後所方所と著あり半
 無る後む略と比の口刻方より持家比の所刻ありしと
 諸当村より元源宝永の比七の箇の次といえる壺蘆と
 出せり藏頭藏虎よりて葦藁のふた右園の夜と号
 人より血よりその七号佩して源院と珊瑚珠の緒メ
 少料して貴家せふ所よりは代儀の月より今其



佳胤
印

〇六



〇七

て波村より壺蓋を作しど圍の夜といへる名ぶふ多る人ば
 ○酒を飲て面色赤くおぼるものこれ厥からるのかりを色の
 まくかりともの肝の厥なりとの故色の赤くかりの酒
 カ公の膈と助る左路達とありて物よほび面色の青くかり者
 と酒方と肝の膈小備と左路を費し元来謀魚の友たる
 肝を得る次ゆいらく理原を去る夫肝の膈本に属せし
 左水生木の理り太豪飲り究て面色をれりとのゆかりま
 公の膈火から水割火の理にして飲ゆど然ども酒の
 水打れども氣味辛熱の物ゆ熱物を火と口氣相旺と
 公の膈と結氣したるど肺金熱火怒と脾去ハ土

郵水とこれれを腎水と辛熱の火と痛し故を肝膈
 と酒と結氣と之膈を酒を更けざるは青赤二色と氣との
 ○湯の膈との火と是は法を膈との火と是は
 故を方歩り一板の嶮道を行て七時かば幾許し太
 之湯して骨と困睡せし夜を夢外て何事も是るなり
 ぶらよ知ら大よ愛と見るなり是湯をとことか左なりと
 なるといふなりとめを此は是るし是ぶらとに骨釋也是
 と傳送減しヤりハ亦淫わたりか
 體中少法湯の二三流通とことたこととこと
 冷水を飲ても小使暖く極暑中熱湯を飲ても小使ら

火傷セゴハ法陽ニ乳を注ぎて過不及けは

○トアノ妖物を母ふかして一とて元始と云ふ女を

篇とて夫と旁と次第に先女の化物然く人と害し

家を破りて一に之國を傾くかハ妖物古来此世に

○麻子金子瀧子桃子初ら此類いばとて古来より子孫

と係りて初例とて今於奥州南部の氏洛初ら異物と音

子の字を添く移と筆子菜磁子風呂敷子といふ青之

海内かて子と稱せりや

○高山輝と云清古人之室曆明和の比を船名せり

○蔵漂流と東海と着る官附より東海道と称す

長評へ送りぬり降踏小富士山を見て大よと佈り降後

高山輝と交りて布とては織り七頭紙書之商賈にて

文雅の人物なりと云高山輝は移といふ支那とて

夷の國を巡りて人に富士山のては文がしとて

中一と獨秀と云沖とてはあつ合不叙と云へ

卵小勝と云は狼也兒来あり之皇孫連治と云

海内は海と富嶽の青骨に獨歩一貨材大よ富饒と云

俗に云く人物也一華美夷一般に無れ処ありといふ

物を慕ひ漂流の後も連年法陽小来と云りしや

○桑栲の俗名の浪カマスゴと云物を食ふ湯は園海

價よりむづりのかを海濱の漢人といふことありしは
や河成子かり長じていふる物とふとるやうな明なきは
名は希しむをばりる序田令はふやびりあり

○米麦粉の轉けを江州の氏格カニといふり我内七いボ
ナリしと云ゆふカニ漢ありわめあつて我内七い月の
雜煮をわんと云し義ありいんは吾家計はうん云云を
箸と云大坂うん者云たんでけを義と云い上り方し
をいづるに川口望田浦の漢者の書札をまかぬと云
約半舟なり系を東浦塞大坂を南尻袋内ホウブラと
孫をいそいボラハと云い上りく蜜丸あり和州の

意をいれと云ふとてクドと云火床の略語なるをこれ
ロクタイと云煖火をかりていばはは湖邊にわんを

○矢脊小原の去氏とていしてゲウと云い下師あり
む官氏とて新し文と百世とて惣發ありいふ由緒あり
唯の去氏といふ師とていふ月林なりとていふ

○中野大郎の書代集合は白卷管宗類聚國史式百卷
大同親聚方式百卷といふにゆふ東部の塙檢校輯らば
聖書於後といふもの二百を今般板してて死況とて
畏の功とていふとて中野流布なりとて或播神家乃
家司作堂氏あり方とて是はたね實に用圖と米の大業

云のあまをぢだんご踏しとて地鞠とてしの特詰を鞠
 塲を踏容るれどかかりしとて踏碇を文選の注し踏碇と
 洞谷空大魚と有血と血を洗くしとて唐書源林が傳ふ以血
 洗血汚穢益甚く有釜中より立ちあはれ身を湯にそで飯を
 たりとて米飯の丸(お)は暹羅の湯に釜中に米粒をうりしと
 ○清去の俗語(表)高いと短紀とて今長崎などある高貴乃
 常に用るをさうとて今は本邦の高貴なりとの寂しさを
 不常ものしりて平く不短紀なりとて

東牖子卷之二終

